

# 第51回インナーゼミナール大会

## 研究計画書

|        |   |      |         |
|--------|---|------|---------|
| ゼミ名    | 足立ゼミ  | チーム名 | 超源 Rush |
| タイトル   | 貧困と奨学金～貧困連鎖解消に向けて～  |      |         |
| テーマ群   | g)その他   |      |         |
| メンバー   | 渡部丈 小松龍世 上月亮典 青柳友貴 小紫理加 渡辺翔子 山本凌平 酒井啓秀<br>四宮璃子 宮本尚之   |      |         |
| 研究計画内容 | <p>「研究背景」</p> <p>子供の貧困問題は、近年注目を集めている社会問題の1つである。現在GDP規模3位である日本でさえも、貧困率16%と7人に1人が貧困状態である。このような貧困家庭で育つ子どもは、学習機会を損失し、高校及び大学への進学が難しく、将来の職業の選択肢が少なくなり、低賃金の不安定な仕事につくことが多い。それによって、次の世代も貧困の状態に陥るといふ貧困の世代間連鎖に直面している。この点について、先行研究でも検証されてきた。暮石・若林(2017)では、「21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)」の2001年、2004年、2007年、2010年、2013年のデータでロジット分析を用いて分析を行った。推計結果から、持続的貧困の状態にある子どもの割合は、母子世帯のほうが二人親世帯よりも高く、貧困に苦しんでいることを示している。このような貧困問題に対し、フィンランドでは返済義務が無い給付型奨学金が提供されることで、大学への進学率が高い。一方、国内の奨学金の大半が日本学生支援機構の貸与型奨学金である。文部科学省によれば、日本の奨学金の87.6%が貸与型であり、給付型は0.6%と低い。このような提供体制によって、大学進学率の向上に繋がっていない恐れがある。そこで、本研究では、奨学金の提供体制に注目し、貧困の世代間連鎖を断ち切る方法として、奨学金と大学進学率との関係を検証する。</p> <p>「研究内容」</p> <p>本研究では、貧困世帯への支援の一つとして給付型奨学金を取り上げ、給付型奨学金と進学希望率、大学進学率そして就職率との関係を明らかにする。具体的には、貧困層の大学進学率および就職率を上げるには、給付型奨学金受給率を上げることが必要ではないかという仮説のもと、両親年収別の給付型奨学金受給率と大学進学率および就職率との関係を推計し、その結果をもとに、給付型奨学金受給率の増加に繋がる政策提案を検討する。</p> <p>「期待される効果」</p> <p>本研究の推計結果から、貧困世帯への有効な支援として給付型奨学金の効果を示し、所得の低い家庭への学力向上させるための教師対象のサバティカル休暇制度などの貧困連鎖の解消にむけた具体的な政策提案が期待される。</p> <p>「主な参考文献」</p> <p>暮石渉・若林緑(2017)「子どものいる世帯の貧困の持続性の検証。」『社会保障研究』2(1), pp.90-105.</p> |      |         |